

シンポジウム

ザ・シンポジウムみなと in 室蘭

世界と日本の産業を支える

室蘭港の未来をみつめて

～世界に貢献する室蘭港の港湾戦略を考える～

ザ・シンポジウムみなと実行委員会

室蘭港の将来について考える「ザ・シンポジウムみなと in 室蘭」(主催・ザ・シンポジウムみなと実行委員会)が11月21日、室蘭市輪西町の室蘭市市民会館で開かれた。東京都市大の中村英夫学長が「明日の室蘭への一つの振興策」と題して基調講演。パネル討論では、青山剛室蘭市長、北海道経済連合会常務理事の浜田剛一さん、まちづくりに取り組む室蘭のNPO法人「羅針盤」理事長の白川皓一さん、フリーアナウンサーの野宮範子さん＝室蘭出身＝が、「室蘭港の新たな飛躍に向けて」をテーマに意見を交わし、港を核としたまちづくりについて提言しました。

基調講演

有望なクルーズ観光 周辺の観光資源生かそう

中村 英夫 氏

室蘭は人口減、港湾取扱量の大幅減と大変に苦しんでいる状況です。欧州にはかつての重工業港湾都市が振興策でよみがえった例があります。例えば、英国のグラスゴーは造船業から企業誘致による先端産業に、スペインのビルバオは鉄鋼・造船業から観光・文化都市へと変貌をとげました。

地域振興策に必要な要素は大きく三つあります。一つ目は文化や経済、インフラなど地域が有する資源。二つ目は社会の需要。三つ目は行政や地元産業界の熱意といった実現力です。

では室蘭の将来を見据え振興策を考えてみます。私の提案として「クルーズ船観光の誘致」

を挙げたい。欧州では今、クルーズ船観光が大変な勢いで伸びています。室蘭には立派な港湾施設があり、周辺地域に素晴らしい観光資源がある。

九州の博多港を例にすると、2千数百人が乗船する中国からの大型クルーズ船が入港しています。乗船客は裕福層ではないですが、旅行の楽しみや目的は買い物。調べたところ、商業施設などで平均30万円ほどを支出しているといえます。

このような3千人規模のクルーズ船が3日に1回入港すれば、年100隻で30万人に上ります。地元経済にとっては絶大な効果がある。極

端なことを言えば1万5千～2万人分の雇用に相当します。人口9万2千人の室蘭で考えれば、そのスケールがわかるはずです。

北海道はアジアの他の国にない緑、火山、食、温泉などケタ違いの景観を持っています。中国だけではなく、世界中から集客が見込めます。クルーズ船誘致の試みは、大いに期待できる振興策だと思うのです。

そのために何をすべきか。官民上げての船の誘致や都市景観の整備、観光プログラムの充実など、やらなくてはならないことは山ほどあります。ですがその分、成功した時に得られるものも大変大きいのです。

室蘭の特性である重工業やものづくり技術はもちろん大切な要素ですが、それだけにとらわれ、こだわってはいずれは将来は見えない。思い切っけて抜け出すことも必要ではないでしょうか。

北海道は25年前に比べ、韓国にはるかに置いていかれています。なぜ、振興しないのか。北海道に足りないものがいくつもあると率直に言わなければなりません。それは、行政のリーダーシップや経済界のバックアップが弱いこと。室蘭には青山剛市長という若々しいリーダーがいます。地元経済界が本気になって取り組み、市民が盛り上げ、室蘭を再び活気のある地域にしてもらいたいと願っています。



なかむら・ひでお 東京大工学部卒業後、帝都高速度交通営団に入社。その後、東京大学、シュツットガルト大学(独)、東京工業大学で都市交通の研究に従事し、東京大学名誉教授、運輸政策研究所所長などを歴任。交通政策の第一人者として知られる。2004年から現職。

パネルディスカッション

世界に貢献する室蘭港をめざして

「心技体」で未来築け

加賀屋

道産食材の発信地に

青山

工大の技術力活用を

浜田

港文化を守る心から

白川

寄港地ツアーも魅力

野宮

加賀屋誠一さん 室蘭港、室蘭市の現状や課題をどう思いますか。

青山 剛さん 開港140年・市制施行90年の節目の年。100年培われた鉄鋼技術に支えられてきましたが、現在の人口はピークの18万人から半減し、高齢化率は31%に上っています。港の新しい動きとしては、崎守埠頭にある引き込み線（貨物専用線路）がアジアへの中古列車輸出に活用されています。臨海部ぎりぎりにある引き込み線の優位性を生かしていきたい。

浜田剛一さん 道内総生産は2001年の20.5兆円をピークに09年には19.2兆円に減りまし

た。移輸出はほぼ横ばい、移輸入は7兆6千億円から5兆3千億円に減少しています。移輸出、移輸入の維持拡大という室蘭市の課題は北海道の課題でもあります。室蘭市の人口は道内の1.7%ですが、製造品出荷額は道内の20%を占め、産業港湾というインフラを背景に道内のものづくり産業を支えてきました。海運は運賃が安く大量に輸送できるという利点がありましたが、スピードが遅いなどデメリットもある。新たな魅力づくりの再構築が必要です。

白川皓一さん 天然の良港である室蘭港の衰退を感じ、何とか活用策はないかと憂う市民が

集まってNPO法人を設立しました。重工業の恩恵に感謝しながらも、それだけに頼ってはいけな。港文化を発信しよう、そんな思いでまちづくりに取り組んでいます。豊かな価値観を持ち「この街で生きるんだ」という思いを共有していきたい。

野宮範子さん 室蘭港は市民が日常的に行く港ではありません。立派な港なのにもったいない。人が行き来する拠点として国内外のクルーズ船に注目しています。

加賀屋 室蘭市、室蘭港が元気になるために、どう進むべきでしょうか。

青山 港の活用をPRするポートセールスで、船主から、クルーズ船を毎年利用する人が多い一方、乗客向けに寄港地で実施する観光ツアーはマンネリ気味だと聞きました。周辺市町と力を合わせメニューを追加していくことが大切です。今冬から室蘭産ホタテを「蘭扇」のブランド名で東京・築地市場へ出荷するので、水産もあると訴えたい。芥川賞作家も3人出ています。港を題材にした作品もあり、文化の薫りのする港町室蘭を訴えていきたい。

浜田 地域資源としてまず思い浮かぶのは室蘭港。次は、技術系で評価の高い室蘭工大です。工大を中核に企業の課題解決を図るという研究サポート機能をさらに向上させてPRを図ることが、室蘭市や室蘭港の魅力向上に結びつくのではないのでしょうか。

白川 文化の原点は私たちの歴史であり、それを肌で感じていかに大事にするかが大切です。明治9年に室蘭初の小学校として開校した常盤小が2011年に武揚小と統合し、「常盤」の名がなくなりました。新しいものをつくるだけが文化ではありません。伝統や歴史を大切にする心を市民が持っているかどうか問題なのです。私たちが今後の室蘭をつくっていくとき、そういうところから始めなくてはならないのです。

野宮 この夏、私が出演するラジオ番組で20代の女性リポーターが大型客船「飛鳥（監）」の日本一周クルーズに乗船しました。リポーターによると、船の設備や食事にはもちろん満足なんですが、人間は陸に住む動物なので、港が近づくるとテンションが上がるらしいのです。各港の上陸は一日だけですが、その港町にはものすごく愛着を感じたというんですね。ですから、いい印象を与えれば、また来てくれるはず。寄港地でのツアーは驚くほど遠くまで足を延ばします。室蘭でも、欲張りなツアープランを組むことが可能だと思います。お土産についても、室蘭港や周辺にセンスのいいセレクトショップみたいなものがあれば買うのではないのでしょうか。

白川 室蘭では、海外からのクルーズ船の乗客を、高校生や大学生が出迎えました。片言の英語で、乗客と言葉はあまり通じませんが、乗客アンケートでは『また来たい』という声が多かった。心のふれ合いがあったからなんです。心のもてなしが重要です。

加賀屋 室蘭の方向性についてお考えは。

浜田 人口減少のダメージが大きいのは、大都市より地方都市です。厚生労働省の調べでは、室蘭の人口は2035年に6万2千人にまで減少すると見通しが示されています。今より34%くらい減少するのです。危機感を持ち、効果が表れるような対策を練っていかなければなりません。

野宮 今、バルというのがはやっています。高度成長期に室蘭の輪西にも、酒をコップに盛り切り1杯ずつ売る「もっきりやさん」がたくさんありました。あれはまさにバルです。高いカウンターがあって立ち飲み。そこで食べるのが昔は缶詰でしたが、今は室蘭の食がいろいろあるので、「室蘭バル」ができるんじゃないかなと思います。

青山 クルーズ船で西胆振の食材を使って

コーディネーター



加賀屋 誠一氏

かがや・せいいち 北大工学部卒業後、道開発庁土木試験所で研究員に。その後、北大工学部、同大学院の教授を歴任。2012年から現職。

ほしいとPRしています。室蘭港は釜山とつながっている国際コンテナ航路もありますし、道内ではフード特区として道産食材をアジアへ発信しようという動きもあります。今ある施設を活用しながら港を発展させていくことが大切。地道な努力を続けていきたいと思えます。

加賀屋 地域の活性化、未来を考えると心技体がしっかりしている必要があります。室蘭をよい町にしたい心。工業の歴史の中で蓄積された技。そして天然の良港である室蘭港という体。住民と産官学が一体となり地域の埋もれた力を掘り起こし、新しい室蘭を作ることを提案したい。

本稿は平成24年12月22日北海道新聞 日胆版に掲載された記事を同社の了解のもとに転載したものである。

パネリスト



青山 剛氏

あおやま・たけし 室蘭工大で都市工学を学びながら大学の仲間たちとまちづくり活動を展開。室蘭市議を2期務めた後、2011年から現職。



浜田 剛一氏

はまだ・こういち 小樽商大卒業後、拓銀に入行。その後、北洋銀で人事部調査役。2006年に北海道経済連合会理事事務局長に就任。2012年から現職。



白川 皓一氏

しらかわ・こういち 室蘭に生まれ育ち、1964年に家業のヤマコしらかわに入社。室蘭港を中心としたにぎわいづくりを目指しNPO 羅針盤を設立。



野宮 範子氏

のみや・のりこ 室蘭市出身で早大教育学部卒業後、HBCのアナウンサーに。その後フリーとなり放送、新聞など各メディアで活躍中。

主催／「ザ・シンポジウムみなと実行委員会」

北海道経済連合会、(社)北海道商工会議所連合会、北海道港湾協会、(社)寒地港湾技術研究センター、(財)港湾空港建設技術サービスセンター、北海道、北海道開発局

協賛／(一財)北海道開発協会、(一社)北海道開発技術センター、北海道港湾振興団体連合会、北海道港湾空港建設協会、北海道ポートエンジニアリング協会、(社)日本舟艇工業会北海道支部、NPO 法人北海道みなとの文化振興機構、室蘭商工会議所、(一社)室蘭観光協会

後援／室蘭市、室蘭港湾振興会、朝日新聞北海道支社、毎日新聞北海道支社、読売新聞北海道支社、北海道新聞社、室蘭民報社、NHK 室蘭放送局、HBC 北海道放送、STV 札幌テレビ放送、HTB 北海道テレビ、TVh テレビ北海道、UHB 北海道文化放送